

カキ「蜂屋」成木樹で隔年結果を防止するせん定・結実管理法

農業・園芸総合研究所

1 取り上げた理由

干し柿を生産する場合には、果実のついている枝ごと収穫するため翌年の結果母枝も同時に剪除することになる。その結果、翌年の花芽が安定的に確保できず隔年結果が激しい。また、県内の主力品種である「蜂屋」はもともと生理落果が多い性質を持っている。そこで、整枝・せん定法と結実管理法を検討した結果、慣行栽培と比較して隔年結果が少なく生産が安定する技術が確立されたので普及技術とする。

2 普及技術

隔年結果を防止するためには、以下の2種類のせん定・結実管理法のいずれかを用いる。

1) 主枝交互結実法

- (1) 1樹の主枝数のうち、半分ずつ着果主枝と不着果主枝を配置し、1年毎に交換する。
- (2) 着果主枝は基本的に無せん定、無摘蕾、無摘果とし、不着果主枝は冬季せん定時に1年枝の葉芽の位置で切り返す。
- (3) 不着果主枝に蕾が着生した場合は全て摘蕾または摘果する。
- (4) 平均1果重は慣行栽培(対照区)よりも大きくなる(図3)。

2) 予備枝利用法(図1)

- (1) 予備枝は主枝上の1年枝を利用し、冬季せん定時に配置する。1年枝上の先端から数芽の花芽を剪除し、葉芽部分まで切り返す。

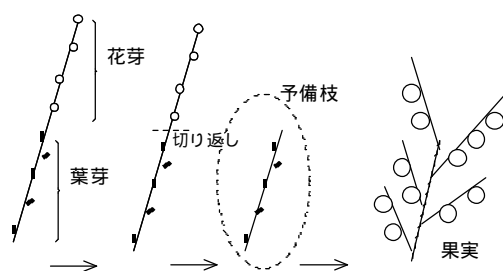


図1 予備枝利用法の概略図

- (2) 予備枝は、直径が太い程、長さが長いほど、新梢発生本数が多く発生する(表1)。
- (3) 予備枝上の収穫果実が全収穫数に占める貢献度は20%程度となる(表2)。
- (4) 予備枝を配置する際に、1年枝の切り返し部分の花芽と葉芽の区別が判然とせず、予備枝上から発生した1年枝に蕾が着生した場合は全て摘蕾または摘果する。
- (5) 平均1果重は慣行栽培よりも大きくなる(図3)。

3 利活用の留意点

- 1) 主枝交互結実法は、当年着果主枝に相当数の果実が着果するので、風害、枝折れ防止のため支柱かけ等の管理を徹底する。
- 2) 樹毎に交互結実させる方法は、主枝交互結実法あるいは予備枝利用法よりも累積収量が劣り、平均一果重も小さい。
- 3) このせん定・結実管理法は、作業性が大きく劣る高木化した樹では、低い位置から発生している主枝まで樹を切り下げる等の方法で低樹高化を図ってからおこなう。

(問い合わせ先：農業・園芸総合研究所園芸栽培部 電話022-383-8132)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間 中山間地に適したカキの生産性向上と軽労化技術の確立（平成12～16年度）

2) 参考データ

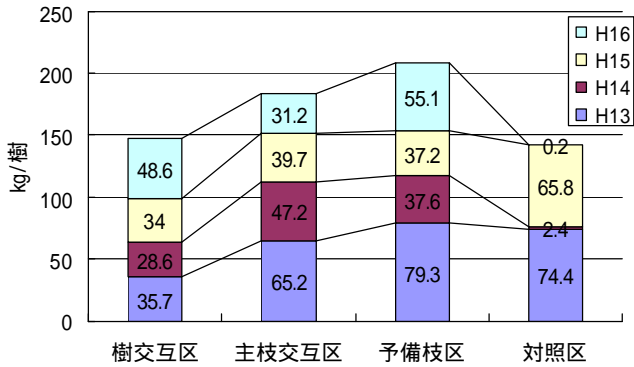


図2 累積収量の比較

表1 予備枝の形質と発生新梢，着蕾との関係（平成13年）

	予備枝径	予備前全長	切返し程度	予備枝残長	発生新梢数	着蕾数
予備枝径	1					
予備前全長	0.840**	1				
切返し程度	-0.076	-0.092	1			
予備枝残長	0.677**	0.807**	-0.633**	1		
発生新梢数	0.734**	0.744**	-0.397**	0.781**	1	
着蕾数	0.305**	0.340**	-0.296*	0.401**	0.439**	1

n=43

z:**1% , *は5%水準で有意差有り

表2 予備枝上の収穫果実が全収穫数に占める貢献度（平成16年）

予備枝上の果実数 (個)	全収穫個数 (個)	貢献度 (%)
54	243	22.0

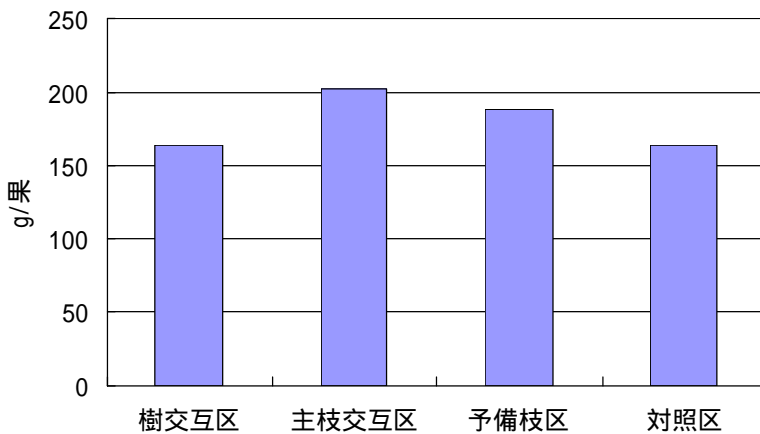


図3 剪定・結実管理法の違いが1果重に及ぼす影響（平成14～16年の平均）

3) 発表論文等